

KOKORO

特集



センター附属施設紹介
「名古屋大学心理発達相談室」

名古屋大学発達心理精神科学教育研究センターには、「名古屋大学心理発達相談室」という地域に開かれた外來の相談機関が設置されています。平成13年にセンターが開設される以前から、名古屋大学教育学部の心理臨床の実践の場として、また臨床心理を学ぶ院生の訓練の場として50年以上の長きにわたって歴史を刻んできた相談室です。現在は、名古屋大学大学院教育発達科学研究科で臨床心理士の資格取得を目指す院生を中心とした相談員約70名と、指導的な役割を果たす学外の専門家の指導員30名、臨床心理学系の教員8名が相談体制にあたっています。その歴史と、活動の意義について、紹介します。



心理発達相談室 玄関



第1 プレイルーム

センター附属施設紹介 「名古屋大学心理発達相談室」

心理発達相談室の歴史 ～心理発達相談室とは?～

センターには、心理発達相談室が併設されています。場所は教育学部棟の北側、表通りからは少し入った所、その性格上ひっそりとしたたずまいです。本相談室の歴史は古く1955年に遡ります。当時の教育学部教育心理学教室の教員が、主に学校場面での心理学的問題に実際に取り組む場として設置されたガイダンスクリニックがその前身です。名古屋大学における実践に根ざした臨床心理学研究の第一歩がこのクリニックから始まったといえます。

当初は、学校教師を対象としたガイダンス機能を中心としてきたクリニックですが、時代と社会の要請とともに、次第に学校教師からの相談のみではなく、子どもやその保護者からの相談、そして青年期や成人からの心の相談が増加し、1970年には「臨床心理相談室」と改称、1985年には「心理教育相談室」へと2度の改称を経て、2001年に発達心理精神科学教育研究センターの発足と同時にその附属施設として「心理発達相談室」は新たな歩みを始め現在に至っています。

この間に、相談室での活動を基盤として発達障害児、母子関係、児童思春期の心の問題に対する援助実践・研究や心理アセスメントの研究・開発など多くの実践と研究の実績を積み重ねてきました。

また学生の教育においては、臨床心理士養成のための実践訓練施設として、大学院生が日々、教員の指導のもとに学外からの来談者との面接を通して将来の臨床心理士を目指して訓練を続けています。

現在、相談室スタッフとして所属するのは、教員、大学院生、指導員（主に本学大学院を修了した学外大学等の教員）など合わせて100名を超える大所帯となっています。



待合室



面接室

このように本相談室は、多くのスタッフの下支えのもと、学外の来談者に対する臨床実践、大学院生に対する実践教育、そして心理学研究という大きく3つの機能を通して社会貢献を行うことを使命としています。

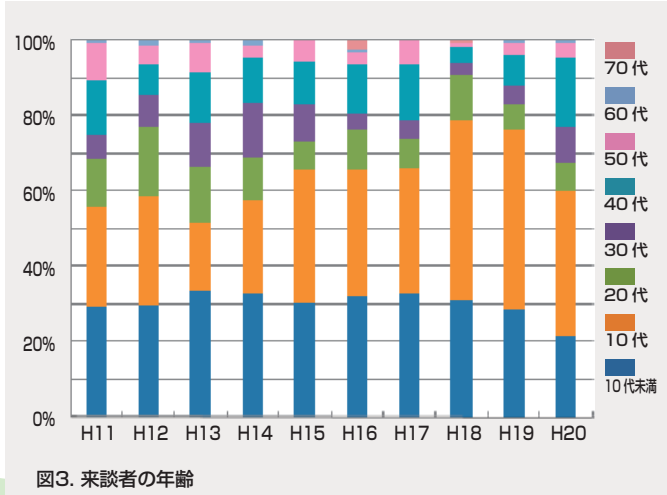
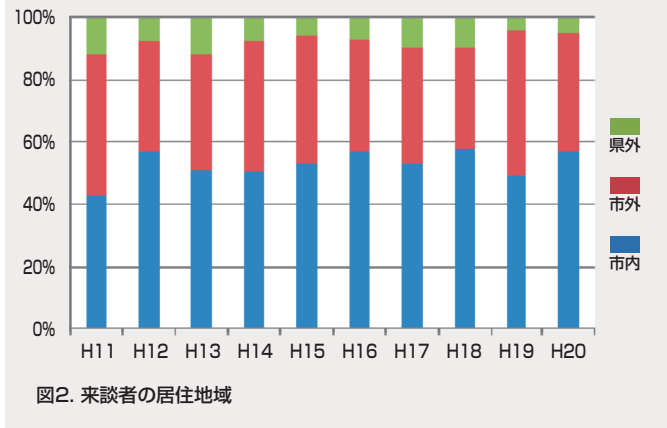
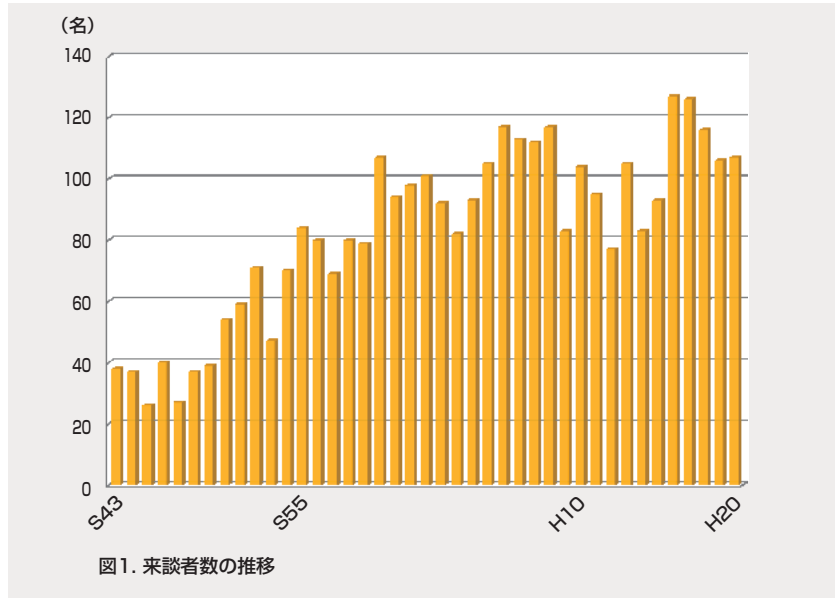
来談者の概要

～どこから、どのような方が相談にみえるのか～

図1. は1968年度（昭和43年）からの新規受付来談者数です。多少増減はありますが、最近では年間100名前後の新規の相談を受けつけています。

来談される方の居住地については、名古屋市内からの来談者が全体のほぼ半数を占め、愛知県内の方で約90%を占めています（図2）。一方、約10%の来談者は岐阜県、長野県や三重県など県外居住者であり、名古屋市外を含めると、多くの方が時間をかけて来談されていることとなります。当相談室が広く愛知県内外の地域における主要な心の相談機関の1つとしての社会的役割を担っていると考えられます。

来談される方の年齢層は、過去10年間の統計では未成年の来談者が約60%、成人が約40%となっています。当相談室では子どもの来談ケースが多いことが特徴です（図3）。10代までの来談の主訴をみると、発達障害、情緒障害や不登校などが多く、成人では対人関係、性格上の問



題や家族関係の問題などが多くなっています。最近の特徴としては、臨床心理学的な見立てにおいて、複雑な見立てが必要な心の問題も多くなっています。

相談室での臨床実践 ～どのように面接が行われるのか～

来談された方は、インタビュー面接を経て、本相談室における面接の適用と判断された場合には、継続的な心理面接が始まります。

継続面接になった場合、子どもと保護者の並行面接では子どもはプレイルームでのプレイセラピー(遊戯療法)、保護者は別室でのカウンセリングをそれぞれの担当者が行います。1回の面接は約50分です。成人面接の場合には、面接室でのカウンセリングが中心となります。現在は、子どもの来談が多いことから、親子並行面接が増加する傾向にあります。

一般的には心理面接は比較的長期にわたることが多く、特に子どもの場合には、数年にわたり継続的に心の発達の援助を行うこともあります。心の問題を抱える子どもや成人の方に対する心理臨床実践は一朝一夕に終わるものではありません。長い時間をかけて来談者の方の主体

的な歩みに寄り添った援助が何よりも大切なこととなります。

実践教育の機能 ～大学院生はどのように実践の訓練を行っているのか～

本相談室において実践実習を行っているのは教育発達科学研究科の精神発達臨床科学講座に在籍する大学院生です。実習院生に対し教員がスーパーバイザーとなり、指導を受けながら実際の心理面接を行っています。

また院生は、本相談室での臨床実践を基礎訓練として、学外の病院(大学医学部附属病院、精神病院など)、学校や児童福祉施設での実習も並行して行い、将来の心の専門家として日々研鑽を積んでいます。

今後の課題と社会的期待 ～時代の流れとともに～

21世紀は心の時代であると言われています。物質的な豊かさや経済発展を追い求めた20世紀から21世紀に入ると、ほぼ時を同じくして、世界では経済状況の停滞や国家間の摩擦などこれまでの社会システムにきしみの兆しが見えてきました。それに伴ってわが国では、うつ病や自殺の増加、子どものいじめや虐待の問題など心の問題が増加しています。

本相談室では、現在、名古屋市の委託事業として自死遺族カウンセリングを継続的に実施していますが、このような社会からの要請は今後ますます増加するのではないかと考えられます。大学の附属施設として、地域社会に対する心理援助の実践、心の専門家の養成、そして心の問題に関する研究という3本柱を通して今後も本相談室は社会貢献してゆきたいと考えています。



活動報告

2010年度 研修会・講演など（センター主催・共催分）

平成22年 6月6日

第25回ハイリスク児フォローアップ研究会

大会テーマ

「支援をつなぐということ

～長期的な支援と多職種連携」

会頭：永田 雅子（発達心理精神科学教育研究センター）

場所：名古屋大学附属病院 中央診療棟3階 講堂

特別講演 家族からのメッセージ

「育ちゆくNっ子とともに

～私たちのフォローアップ体験より～」

Nくらぶ 五十嵐 雅子・安斎 砂知子

シンポジウム

「多職種からみた支援と連携の課題」

1) 親子の関係性に目を向けた早期介入

聖隷クリストファー大学 大城 昌平

2) NICU を早期療育のスタートに

豊田市子ども発達センター 高橋 脩

3) 学童期の課題とフォローアップ—子ども・家族・学校をつなげる支援を目指す—

お茶の水女子大学大学院 篁 倫子

一般演題12題

参加者人数：164名

8月3日

知多市特別支援教育部会夏季研修会

「学習障害児の通常学級における理解と支援について」

講師：島垣 智恵（発達心理精神科学教育研究センター）

「通常学級に在籍するアスペルガー症候群の子どもへの関わり」

講師：野呂 健二（発達心理精神科学教育研究センター）

場所：知多市民体育館

9月7日

公開講演

「青少年とPTSD」

講師：Julia Huemer（Medical University Vienna）

場所：名古屋大学教育学部第3講義室

12月4日（日）

第20回日本乳幼児医学心理学会

大会テーマ

「親と子の関係性と発達の支援」

会頭：永田 雅子（発達心理精神科学教育研究センター）

場所：野依記念学術交流館（名古屋大学東山キャンパス）

会長講演

「周産期と発達支援の場からみえてくるもの」

特別企画

「周産期臨床と発達臨床の出会い」

1) 親と子の出会いと新生児医療

聖マリアンナ医科大学 堀内 勁

2) 新生児にこころはあるのか

大正大学 滝川 一廣

一般演題12題・ポスター演題8題

参加者人数：121名



平成23年 3月12日

発達障害児支援者向け研修会

「学習障害の特徴と具体的な支援法について」

講師：島垣 智恵（発達心理精神科学教育研究センター）

場所：名古屋大学文系総合館8F カンファレンスホール

Calendar 来年度予定

2011年度 講演の予定（センター主催・共催のみ）

6月25日（土）14時～

“Foreign Language education in Finland”
フィンランドにおける外国語教育

Milovanov, Riia Karita 先生 (University of Turku)

7月30日（土）14時～

“なかなか大人にならない若者たち
—「成人形成期 Emerging adulthood」の意識と
アイデンティティの形成：イタリアの場合—”

Crocetti, Elisabetta 先生 (University of Macerata)

* 詳細は発達心理精神科学教育研究センターのホームページをご参照下さい

2011年度 客員准教授

Milovanov, Riia Karita

University of Turku（フィンランド）

分野：児童精神医学

研究テーマ：臨床心理学的視点からみた外国語教育

受入期間：23年6月15日～23年7月20日

Crocetti, Elisabetta

University of Macerata（イタリア）

分野：学校カウンセリング

研究テーマ：現代日本における青年のアイデンティティ発達

受入期間：23年7月19日～23年8月19日

2010年度 客員教授 Julia Huemer 先生

PTSD

センターでは 毎年 海外からの客員教員を招聘し、センター教員をはじめ教育発達科学研究科院生を交えて活発な研究交流を行っています。

2010年6月から2010年9月まで、オーストリアにあるウィーン医科大学児童精神科のJulia Huemer先生が客員教員として滞在されました。ヒューマー先生は児童精神科医であり、摂食障害や難民の子どもたちのメンタルヘルスを中心として、児童の精神的障害と心理的回復の精神病理学的研究に取り組まれている先生です。

本センターではヒューマー先生の特別講座として、9月7日に「PTSD & Unaccompanied Refugee Minors」と題した公開レクチャーを開催しました。ヒューマー先生が研究とされているアフリカから殺戮を逃れ、家族、故郷と離れ、一人でオーストリアに来た難民の子どもたちのPTSD（心的外傷後ストレス障害）とストレス適応の研究についてご講演をいただきました。講演の中での質疑応答では、年齢による影響についての質問や、海外協力隊としてアフリカの子どもたちへの支援にかかわっていた学外の参加者からの質問も寄せられ、とても内容の濃いレクチャーとなりました。ここにその一部と、参加者の感想を紹介させていただきます。

今回は、未成年者の難民（心に傷を受けやすい若者）のトラウマとストレス適応の研究についてお話したいと思います。

私がつまずいた患者は「保護者を同伴しない未成年の難民」です。ではその定義はというと、18歳未満で、出身国以外の地におり、養育や保護にあたる親、あるいは他に法的または慣習上の後見人がいないものとされています。オーストリアは歴史的にも、近年においても様々な国から難民を受け入れており、そういうことから難民の研究もされております。「ひとりで外国にくることになった難民の子どもたち」についての研究は世界的にもまだまだ非常に少なく、発表されているものは数えるほどです。

彼らは、オーストリアで国が提供した住居にすみ、適応していきます。オーストリアでは、15歳から18歳の保護者をともなわない未成年の難民を多く受け入れています。

スペインなどでは随分小さい子どもの受け入れをしており、6-7歳の子どもたちが多いです。

子どもたちの国籍は内紛がおさまらないソマリア、政治的に不安定で、経済的にひどい状態にあるナイジェリアやガンビアなどです。

そうした子どもたちの精神的健康と適応状況を検討するために行った研究の結果を紹介します。研究の方法として、精神病理学的にはPTSD*（心的外傷後ストレス障害）診断、ストレス適応に関しては、パーソナリティー検査、ナラティブセラピー、心拍数の可変性の生理的評価もします。難民にたいして、このような包括的な検査方法での研究は世界的にもあまり例がありません。

PTSD診断のもととなるDSM-IV（アメリカ精神医学会による精神疾患の分類と診断の手引き）とM.I.N.I Kid（精神疾患簡易構造化面接法小児用）はもともとアメリカでつくられたものなので、文化的に違う難民の子どもたちには適さない質問

もあります。そのような質問ははずしました。

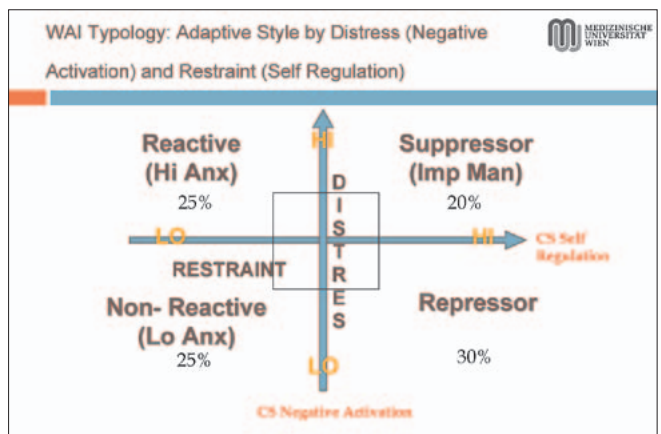
その結果、DSM-IVの基準では、17%の患者が、M.I.N.I Kidでは20%の子どもたちがPTSDと診断されました。では、この結果は高いと考えるべきなのでしょうか。それとも低いととらえることができるのでしょうか。

全体からすると、この結果はすこし高めであると考えられます。ただし他の研究での「保護者をともなわない難民の子どもたちの」のPTSDの率と比較すると私たちの患者のPTSDの発症率は低いものでした。

それでは、なぜ、保護者を伴わない難民の若者が比較的健康的なのでしょうか。本当の意味で健康的であるということは違います。

ストレス適応の調査ではアフリカからきた保護者を伴わない若者はストレスを上手に処理できず、心身の不調につながるディストレス（ストレスに対する耐性）は低く、自己制御が強い抑制タイプ（自分の感情をあまり表現しない）で、記憶を切り離すなど抑圧的な自己防衛（記憶の切り離し）をとっていることが分かりました。研究対象者の68.3%が適応性の低い自己防衛機種のタイプでした。

つまり、この若者たちは無意識の自己抑制と感情の自己規制により多くのストレスを何とかコントロールしているということが判明しました。



*1: PTSD: 外傷後ストレス障害 (posttraumatic stress disorder; PTSD) は、災害、戦闘体験、犯罪被害など、強い恐怖感を伴う衝撃的な出来事を体験したことで生じる特徴的な精神障害です。アメリカ精神医学会の診断マニュアル第4版 (DSM-IV) では、出来事に対する直後の自覚的反応が「強い恐怖、無力感または戦慄」をとまうものとされています。



また子どもたちの語り(ナラティブ)を分析したところ、ストーリーの内容や語彙数などが少ないなど、語ることも十分にできない子どもたちも存在しました。

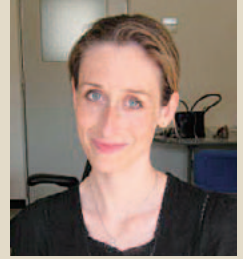
ストレスと緊張の状態で、記憶した心理学的パターンによって、精神病理学的な症状があまり顕著にめされないということは、もしかすると、子どもたちの回復力や逆境にうまく対処する能力を反映しているのかもしれない。

過酷な体験をしても皆がPTSDになるのではなく、人間の適応力、レジリエンス(精神的回復性)、ナラティブ(語り)といったものが影響していくということが言えるのだと思います。

(写真: 講義風景)

Message

ヒューマー先生からのメッセージ



私にとって、名古屋大学の発達心理精神科学教育研究センターで働くことができたことはとても有意義で貴重な経験でした。こちらで、講義をさせていただき、また学生たちと交流できたことをとても感謝しています。特に、児童精神医学の分野で、他の先生方と、意見交換ができた、また文化の違いについて同僚の方とお話できたことはとても貴重な時間でした。構造的な違いですが、オーストリアと違うところは、名古屋大学で体験したような大人の精神科の患者と一緒にではなく、児童精神科の患者は(入院患者・外来共に)別にセッティングされるということです。ですが、私は、臨床においては、専門を超えてのマルチアプローチが必要であると思っています。この点において、名古屋の取り組みはとても理解できます。また、子どもと大人の治療に際して、時間、空間、専門技術を駆使して心理セラピーが行われているのを見てとても感動しました。

この場をお借りして、このチャンスを与えて下さった名古屋大学に感謝すると共に、日本での滞在を忘れがたい、本当に貴重な経験にして下さった、センターの同僚の方々に感謝の気持ちを伝えたいです。

皆様の支えのおかげで、発達心理精神科学教育研究センターの治療現場や、最近の研究についての考えを知ることができ、また日本文化や生活様式を知ることができました。

センターのすばらしい計画のおかげで、自分の研究も進めることができ、オーストリアにもどってからの構想もたてることができました。

ありがとうございました。

公開セミナーに参加して

日本福祉大学 山口智子

犯罪被害者支援に関わるとともに、語りの研究として過酷な体験の語りを聴くことが研究者や支援者にどのような影響を及ぼすのかに関心があり、公開セミナーに参加した。

セミナーでは、アフリカから殺戮を逃れ、家族、故郷と離れ、一人でオーストリアに来た難民の子どもたちのPTSDとストレス適応の研究が紹介された。PTSDと診断されたのは17~20%であったが、ストレス適応ではディストレスが低く、自己制御が強い抑制タイプが多く、ナラティブ分析ではストーリーの内容や語彙数などが少ないという結果だった。過酷な体験をしても皆がPTSDになるのではなく、人間の適応力、レジリエンス、ナラティブ研究の意義を再確認できた。ナラティブ分析は精神分析的な視点も含め、多面的な分析ができるコンピュータプログラムがあるらしい。フロアからは年齢の影響について質問が出され、PTSDの診断基準の動向について聞くことができた。

セミナーを終えて、英語の聞き取りから解放されると、臨床事例では外傷体験を語り直すことの意義が指摘されているが、このような調査研究では、ナラティブとストレス適応、PTSDの関連を示すモデルが想定されているのかなどの疑問が湧いてきた。刺激的で余韻の残る貴重な時間を過ごすことができたことに感謝したい。

Julia Huemer 先生の特別講義の感想

教育発達科学研究科 M2 池田佳菜子

講義はJulia先生がオーストリアで研究なさっている、難民の子どもたちの外傷後ストレス障害(PTSD)についてでした。先生は子どものPTSD症状について、大人との脳の違いにも触れながら、説明してくださいました。保護者がおらず、異国にたった一人で生活している難民の子どもたち(15~18歳)41人に面接を行ったところ、PTSDの診断基準を満たしたのは20%以下と、むしろ健康的な結果となったそうです。しかし、彼らのパーソナリティを調べると、悩みや苦しみが多く、しかもそれを抑制するタイプの子供たちがほとんどでした(68%)。子どもたちが「最もストレスフルだった出来事」について語った、その発話記録も2例、見せてもらいました。戦争における辛い経験をありありと語る子と、楽しい趣味の話をして辛い経験を抑制しようとする子でした。Julia先生はフレンドリーな態度で接して下さるので質問もしやすく、興味深い講義でした。



スタッフ紹介



森田美弥子
センター長・教授・臨床心理学
●研究テーマ：
・ロールシャッハ法
・カウンセリング来談動機
・心理臨床家の養成教育

■児童精神医学分野



本城秀次
教授・児童精神医学
●研究テーマ：
・児童青年期の精神的問題
・乳幼児精神医学
・発達精神病理学



松本真理子
教授・臨床心理学
●研究テーマ：
・子どものメンタルヘルス支援
・子どもの心理アセスメント
・学校臨床心理学

■母子関係援助分野



永田雅子
准教授・発達臨床心理学
●研究テーマ：
・周産期の母子臨床
・発達障害の臨床
・乳幼児精神保健



金子一史
准教授・発達臨床学、臨床心理学
●研究テーマ：
・産後うつ病および産後愛着障害への介入
・近赤外線分光法を用いた母親と乳児の相互作用の検討
・児童期のメンタルヘルスに関する日本とフィンランドとの国際比較研究

■学校カウンセリング分野



鶴田和美
教授・臨床心理学
●研究テーマ：
・大学生への心理的援助



杉村和美
准教授・発達心理学、臨床心理学
●研究テーマ：
・アイデンティティの発達

■軽度発達障害分野における治療教育的支援事業



野邑健二
特任准教授・児童精神医学
●研究テーマ：
・発達障害の臨床
・乳幼児の発達支援
・発達障害児の家族のメンタルヘルス



畠垣智恵
特任助教・臨床心理学
●研究テーマ：
・発達障害の臨床
・心理査定法



岡田香織
特任研究員・発達心理学、臨床心理学
●研究テーマ：
・アイデンティティの発達



田中裕子
特任研究員・発達心理学、臨床心理学
●研究テーマ：
・特別支援教育における心理士の専門性についての検討
・認知特性に配慮した学習支援方法や教材の開発
・学習支援の実践と情緒的効果についての検討



●編集後記

昨年度発刊したこのセンターニュースがもう第2号を迎えました。今回は、心理発達相談室の活動紹介を中心に、2010年度招聘客員外国人研究者の講演会の様子なども報告させていただきました。本センターは、2001年度の創設以来、「こころの臨床」の実践と研究に日々取り組んできました。心理発達相談室は教育学部附属であった時代から数えると55年の歴史をもっています。現在も教育発達科学研究科心理発達科学専攻との協力体制のもとに、地域の方々を対象とした心理相談実践活動を行うこと、及びそうした実践の中に様々な研究成果を還元していくことにより、社会貢献の役割を果たしています。今後も時代のニーズに対応しながら、さらなる発展を目指していきたいと考えております。

KOKORO

名古屋大学発達心理精神科学
教育研究センターニュース

NO.2・2010年度

発達心理精神科学教育研究センター長 森田 美弥子